

「秋田では、通りすがりの人でもきれいな肌を集めて」「手荒れの人をお願ひ」「中国人50人」など、モニター集めにも奔走。同業者は国内に5社程度という環境もあり、依頼は確実に増え、仕事終わりが午前0時を回ることも珍しくない。

化粧品試験会社
インターフェイス代表

野澤 一美さん 43

(秋田市)

「秋田では、通りすがりの人でもビックリするほど肌がきれい」と、ちょっとうらやみを含む笑みを浮かべる。

透き通るような白い肌が特徴的な秋田の女性。様々な機器でその美肌の水分量や色の白さの数値を調べ、客観的に肌美人を決める「秋田の肌美人コンテスト」を26日から始める。いわば「本物の秋田美人」を決め

いどばの
肖像



るコンテストだ。

「インターフェイス」は、同社に登録している秋田市内の約1000人の男女に発売前の化粧品や日用品などを使ってもらい、安全性や有用性を調査すること、を業務とするベンチャー企

業。化粧品業界では、肌の美しさを表す「透明感」が一つのキーワードで、ある化粧品メーカーから「透明感を実感できるような肌のきれいな人を探してほしい」という注文があり、コンテストを思いついた。

*

埼玉県出身。アメリカの語学学校に通っていた傍ら、アルバイトをしたのが化粧品などの治験を行う研

「肌美人」をコンテスト

究所だった。その後、正社員になり、計12年間勤務。研究所を辞めた後、2006年、秋田県内に住む知人の紹介であきた企業活性化センターの創業支援室を訪ね、同年6月、インター社を起業した。

「美人の産地なんて聞いたことがない」という米テキサス州に住むプログラマーの夫、イゴア・シュターンさん(40)の一言も、秋田で起業する後押しとなった。化粧品メーカーへの営業の際、「秋田美人」という言葉の持つ影響も計算した。

起業から2年3か月。アメリカの研究勤務時代に築いた国内の人脈を生かして営業を行い、基礎化粧品が肌に与える影響の有無などを調べるパッチテストのほか、「アトピー性皮膚炎

の人を集めて」「手荒れの人をお願ひ」「中国人50人」など、モニター集めにも奔走。同業者は国内に5社程度という環境もあり、依頼は確実に増え、仕事終わりが午前0時を回ることも珍しくない。

「ゴールは、日本の化粧品会社が海外で、海外の化粧品会社が日本で商品を販売したいという時に、インターフェイスが不可欠という存在になりたい」

*

コンテストの参加者を募集中で、肌美人を10人ほど選ぶ予定。これまで1000人を超す応募があった。コンテストは、来年1月末まで3回の予選を経て、肌美人が決まる。

「1位になる人の肌ってどんな肌なんだろうね。今から楽しみです」。問い合わせはインター社(018・8633・0237)

(早川悦朗)

THE YOMIURI SHIMBUN

読者新聞

2008年(平成20年)
9月22日 曜日